

我孫子市北新田の鳥相 (1998.6-2001.1)

時田賢一¹・中野久夫²

キーワード：鳥相，北新田，我孫子市，千葉

はじめに

我孫子市北新田（以下，北新田）一帯は，千葉・茨城両県境を流れる利根川沿いに広がる水田地帯である。かつて，北新田は柴崎沼を中心にヨシやマコモなどの湿生植物が生い茂る広大な低湿地で，マガン・ヒシクイなどのガン類やカモ類が多数飛来する地域であった。しかし，北新田は戦後まもなく国営千葉代行事業によって耕地化され，更に1969-1989年の県営利根地区圃場整備事業により耕地整理が行われ乾田化された（時田1992）。著者の一人時田は都市化の進んだ我孫子市の台地と利根川に囲まれた残存農耕緑地ともいえる北新田の鳥相の一端を知るため，地域内の外堤防側のヨシ原・水田を中心とした調査地域と内堤防側の斜面林・畑を中心とした調査地域の二ヶ所で，1990年6月～1995年12月に3回の調査（以下，1990-1995調査）を行い，15目35科134種の記録した鳥類について報告した（時田1992，1994，1996）。また，著者の一人中野が1998年6月から観察を開始し，2001年1月まで（以下，1998-2001調査）に新たに記録した鳥類について5目10科19種とヨシ原での標識調査と併せて報告するものである。

調査地と調査の方法

1990-1995調査の調査地域は，図1に示す外堤防側に設定したヨシ *Phragmites australis* を優占種とする抽水植物群落（以下ヨシ原）・水田を中心とした調査地A（約59ha）と内堤防

側に設定した斜面林・畑を中心とした調査地B（約15ha）で，北新田（約343ha）内の限定された比較的狭い地域設定であったのに対し，1998-2001調査の観察地域は，内堤防の内側の市街化調整池域から外堤防の外側の利根川河川敷にまたがり北新田の半分以上をカバーする調査地（約2.5km×0.9km，195ha）を調査地Cと設定し，より広域的な鳥相の把握を試みた。（図1参照）

調査地Cは植生・環境面で大きく3つの地域C1，C2，C3と排水路に分けられる。調査地C1は内堤防付近の段丘地端の斜面林を中心とした地域（以下斜面林）で，斜面林のほか堤防・堤防内側の畑・都市排水路などがあり4号排水路につながっている。調査地C2は水田地域（以下，水田地域）で，水田のほか一部に畑・セイタカアワダチソウ *Solidago altissima* を優占種とする休耕畑があり，中に3本の排水路（2号・3号・4号排水路）が通っている。調査地C3は外堤防内外のヨシ原を中心とした地域（以下ヨシ原）で，堤防には長さ約500mの越流堤があり，その内側に約500m×10mの調整池と約750m×100mのヨシ原がある。堤防の外側にはヨシ・オギ *Miscanthus sacchariflorus* などが繁茂する河川敷がある。

調査地Cにある三つの排水路のうち，外堤防沿いにある2号排水路の上流は，幅約20mで片側一面はコンクリートブロック張りになっているため抽水植物で覆われることは少なくそれに対して下流は幅約40mのコンクリート張りにされてない自然土手となっており水路

¹ 〒270-1145 千葉県我孫子市高野山234-3 我孫子市鳥の博物館

² 〒270-1164 千葉県我孫子市つくし野7-23-13

の50~70%はマコモ *Zizania iatifolia*・ヒメガマ *Typha angustifolia*などの抽水植物で覆われている。水位の高い3月中旬から9月中旬にはカイツブリ・バンの営巣地として利用され、冬期は水位が下がり水幅が水路の3分の1程度になり、水深も浅くサギ類やシギ・チドリ類が採餌できるようになる。

また、水田域の中央部を流れる3号排水路（幅約10m）と南西の内堤防から北東の外堤防に向かって流れる4号排水路（幅約20m）は三面コンクリート張りの水路となっており、水位は年間を通じてほぼ一定で浅くサギ類は通年採餌でき、土砂が堆積した洲状態になっている場所にはシギ類の良い採餌場になっている。なお、北新田は利根川・利根運河分岐点とその約10km下流の大利根橋との間に広がる洪水調整池（田中遊水池とも呼ばれる）の中にあり、利根川の水位が洪水等の原因で危険水位（計画水位は2.54m）を越えると川の水は越流堤から流入し冠水する。

調査地Cの観察はほぼ毎日、2001年1月31日

までの2年8ヶ月間（期間日数976日）に858日（月平均26.8日）の観察を行った。観察は早朝の日の出後約2時間程度、早朝が雨天などで観察が不可能な場合は日中であてた。センサスは調査地C1の内堤防内の市街化調整区域から調査地C2の水田地帯を通り、調査地C3の外堤防まで往復（全長約6km）して行い、上空を通過したもの・鳴声のみのもも含め出現・確認できた種類をすべて記録した。また、1990-1995調査以降も、調査地C3のヨシ原（調査地Aのヨシ原と同じ）での標識調査を継続して実施し、1998-2001調査データに加えた。

種の確認には双眼鏡（8倍及び10倍）と小型望遠鏡（20-40倍）を使用し、標識調査には霞網（36メッシュ及び30メッシュ）×6~14枚を適宜使い分けて使用した。

結果と考察

1. 出現種

1998年6月以降の観察期間中に記録した出

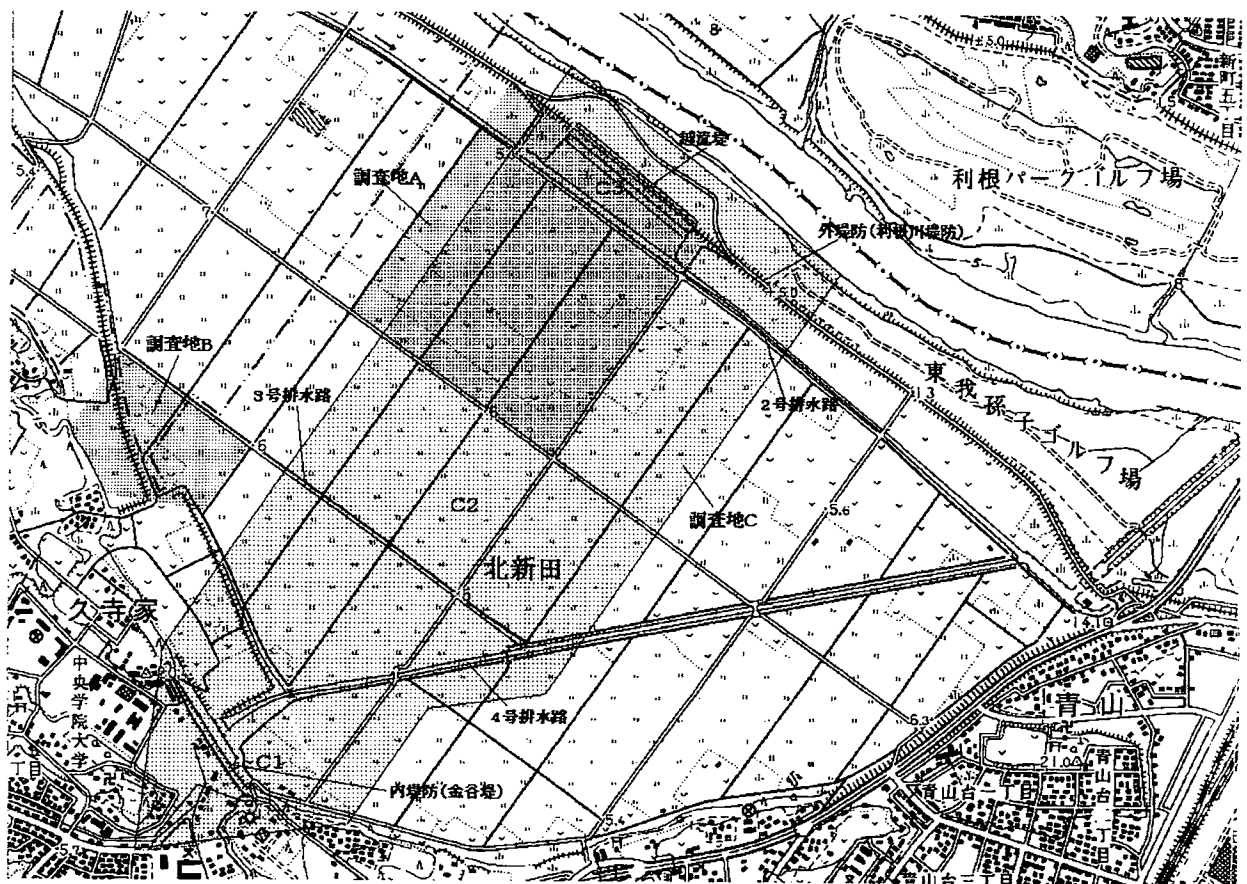


図1 北新田地域内調査地

現種数は14目35科119種（表1）で、その内標識調査によるものが4科5種（表1中の*印）であった。1990-1995調査では、15目35科134種を観察しており、通算（1990.6-2001.1）の出現種は15目38科153種になり日本産鳥類目録改定第6版に記載されている542種（コジュケイを加えて543種）のうち海鳥を省いた日本で記録された鳥類の凡そ31%にあたる。よってここ北新田は、さまざまな鳥が行き交う場所であることがわかる。1998.6以降新たに記録された鳥は5目10科19種（表2）である。これは水田地帯の観察域が広がったこともあり、カモ類とシギ・チドリ類で新たに記録があった11種によることと、ほぼ毎日の観察により1990-1995調査では見落としていた種を補えたことによるものと考えられる。

なお、出現種の分類は日本鳥類目録改定第6版によった。但し、改定6版ではコジュケイを日本産鳥類から外し外来種に入れているが記録にコジュケイも含めた。

月別出現種数の推移（図2）を見ると、1月～6月では2月の48種を最少として次第に増加し、春の渡り最盛期の4月に66種でピークとなり、渡りの終わる6月には年間を通して最少の41種まで減少する。7月～12月では7月の47種（最少）から次第に増加し秋の渡り最盛期の9月に年間を通して最多の67種になり、以降減少に転じるが冬鳥の飛来が増える11月は10月より多い65種であった。

観察期間中ほぼ年間を通して観察された種は、カイツブリ・カワウ・ダイサギ・コサギ・アオサギ・カルガモ・オオタカ・チョウゲンボウ・コジュケイ・キジ・イソシギ・キジバト・カワセミ・コゲラ・ヒバリ・ハクセキレイ・セグロセキレイ・ヒヨドリ・モズ・ウグイス・セッカ・シジ

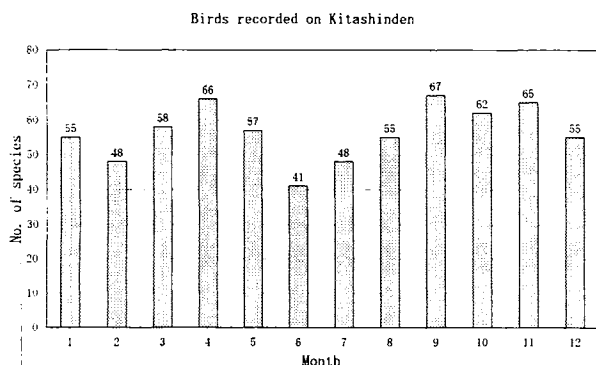


図2 月別出現種数

ユウカラ・メジロ・ホオジロ・カワラヒワ・スズメ・ムクドリ・オナガ・ハシボソガラス・ハシブトガラスの23科30種であった。但し、カイツブリ、カルガモ、セッカは繁殖期の夏には数多く見られるが、冬は見られる数・回数も非常に少なかった。繁殖期（5月～7月）中心に観察された種は、ヨシゴイ・アマサギ・チュウサギ・バン・タマシギ・コチドリ・カッコウ・ツバメ・オオヨシキリなど9科18種であった。また、越冬期（11月～2月）中心に観察された種は、コガモ・ノスリ・チュウヒ・タゲリ・クサシギ・タシギ・キセキレイ・タヒバリ・ジョウビタキ・ツグミ・カシラダカ・アオジ・オオジュリン・ベニマシコ・シメ・カケスなど15科43種であった。なお、クサシギとタシギは繁殖期の6月初旬～7月中旬の期間以外は通年観察された。また、春の渡り・移動期（4月、5月）と秋の渡り・移動期（8月～10月）に観察された種は、ムナグロ・キョウジョシギ・ウズラシギ・ハマシギ・タカブシギ・キアシシギ・チュウシャクシギ・アマツバメ・ショウドウツバメ・ノビタキなど8科25種であったが、特にムナグロは数も多く、春の渡り時は800羽、秋の渡り時は150羽以上が観察された日もあった。なお、留鳥であるトビ・オオバン・シラコバトの3種は希にしか観察されなかった。特にオオバンは過去12年間で1例の記録（2号排水路1998.9.4）しかなく、これは調査地域内に広い開放水面が無いためと考えられる。

2. 出現種の環境利用

2-1. 水田地帯の利用

調査地Cでは、田植えに備え4月の中旬から水田の水張りが始まり、4月下旬～5月中旬に田植が行われる。3月下旬になるとコチドリが飛来し4月になるとムナグロ・キョウジョシギ・キアシシギなど春の渡りのシギ・チドリ類が次第に多くなり、4月の中旬からはアマサギ・チュウサギなどのサギ類も加わり数多くの種類が観察されたが、渡りの終わる5月下旬にはシギ・チドリ類はほとんど観察されなくなった。繁殖期にはゴイサギ・アマサギ・ダイサギ・チュウサギ・コサギなどのサギ類とバン・ヒバリ・セッカが数多く観察され、所々にある畑ではコチドリの営巣も観察された。

また8月～9月には、所々にある調整水田（生産調整のため、代かき・水張りをしているが稲を作っていない水田）で、この地域で繁殖しているカルガモ・コチドリ・イソシギ・タシギの親子やムナグロ・オオジシギ・タシギなど秋の渡りのシギ・チドリ類もよく観察された。特に、1998年には約30m×100m×4枚続きの広い調整水田をはじめとし、10数枚の調整水田があり、ムナグロ・ケリ・ヒバリシギ・エリマキシギ・タシギ・オオジシギ・セイタカシギなどのシギ・チドリ類やサギ類が多数集まっているのが観察された。しかし、調整水田の枚数・面積も年々減少し、観察されるシギ・チドリの数・種類が少なくなっているようだ。

稲刈は8月下旬に始まり9月中旬に終わる。ムナグロは稲刈の終わったあとも10月の下旬まではよく観察され、1998年には11月中旬まで観察された。10月・11月には畦や排水路の土手で時々渡り途中のノビタキが観察された。

越冬期にはタゲリ・キジバト・ヒバリ・タヒバリ・ツグミ・カワラヒワなどが数多く観察された。タゲリは、10月下旬の飛来当初から12月初旬までは100羽以上の群で行動していることが多いが、12月中旬以降は分散し観察できる機会も少なくなり、個体数も減少した。1月以降は田圃以外の草地でも観察されるようになった。また、越冬期にはオオタカ・ノスリ・チュウヒ・チョウゲンボウなどもよく観察され、ハヤブサ・チゴハヤブサ・コチョウゲンボウも時々観察できた。この頃、ハクチョウ類が上空を通過して行くのが時々観察されるが、2001年1月にはコハクチョウ4羽・オオハクチョウ1羽が1週間ばかり留まり、稲の二番穂など採餌しているのが観察された。

2-2. 排水路の利用

留鳥のカワウ、カワセミ・ハクセキレイは調査地Cにある三つの排水路で通年観察され、繁殖期にはカイツブリ・カルガモ・バンの親子やツバメ（水路上）もよく観察された。特に、マコモなどの抽水植物で覆われている2号排水路ではカイツブリ・バンの営巣が観察され、水深が浅い3・4号排水路では春・秋の渡り期にコチドリ・キアシシギ・アオアシシギなどのシギ・チドリ類がよく観察された。

越冬期には水深が浅くなる2号排水路を始めとして他の排水路でもクサシギ・イソシギ・タシギがよく観察された。特に、1998年までの4号排水路には堆積土砂が所々露出し中州もできておりシギ・チドリの絶好の採餌場となっており、1999年にはオジロトウネン2羽の越冬も観察された。しかし、2000年冬の堆積土砂の浚渫以降は全く観察されなくなり、他のシギ・チドリ類もほとんど観察出来なくなってしまう。明らかに堆積土砂により造り出された洲がシギ・チドリ類の大切な採餌場として、また休息の場として重要な場であることがわかる。繁殖期には主として水田で見られたダイサギ・コサギ・アオサギも越冬期にはもっぱら排水路内で採餌するのが観察された。北新田では、狩猟期間中（11月15日～2月15日）には多くのハンターが訪れる。このため、内堤防と外堤防とに挟まれている水田地域の排水路ではカモ類がほとんど観察されず、内堤防と内側にある猟区外の排水路でカルガモ・コガモなどが観察されるだけだった。しかし、猟期前後の3月・4月と9月・10月は内堤防の外側の排水路、特に2号排水路では留鳥のカルガモのほか渡り途中のコガモ・ハシビロガモなどのカモ類がよく観察された。

2-3. ヨシ原の利用

ヨシ原では、繁殖期はヨシゴイ・ウグイス・オオヨシキリ・ホオジロがよく観察されたが、特にオオヨシキリが優占して採餌・営巣地として利用していた。越冬期はホオジロ・カシラダカ・アオジ・オオジュリン・カワラヒワ・シメなどがよく観察されたが、特にオオジュリンが優占して採餌地・ねぐらとして利用しており、河川敷のヨシ原ではカワラヒワ・シメの群がオオブタクサなどの草の実を採餌しているのもよく見られた。また、ヨシ原には8月下旬から約1ヶ月間カワラヒワが数百羽集まり、集団で換羽期を過ごしているのが観察された。1998年11月の標識調査ではオガワコマドリ♂成鳥1個体、1998年11月と2000年11月にはノゴマ♀成鳥1個体を記録（他に1990年12月に1個体の標識記録がある）した。通常ヨシ原での観察では姿を認めるには困難な鳥を数多く標識しており、多くの鳥がヨシ原を採餌・営巣、増・越冬・渡りの重要な中継地や

繁殖地や越冬地として利用されていることがわかっている。

2-4. 斜面林の利用

斜面林では、夏期観察されるのはコジュケイ・コゲラ・ヒヨドリ・メジロ・オナガなどの留鳥のみであったが、越冬期にはアカハラ・シロハラ・アオジなどが加わり、ときにはトラツグミなども観察された。

3. 特記事項

1998年には台風5号による利根川の増水で、9月17日から1週間ほど北新田が冠水し、この時、多くのカルガモやコガモなどのカモ類の遊泳する姿やユリカモメの飛翔が観察され、普段では観察されないアジサシ・コアジサシなども観察された。

2000年5月24日に茨城県南部・千葉県北部地域で猛烈な雹が降り、北新田でもかなりの被害を受けた。特に、ヨシ原や河川敷などの草地では成長途中のヨシやセイタカアワダチソウなどがなぎ倒され、営巣していたヨシゴイやオオヨシキリを初めとする多くの鳥の巣がことごとく壊されてしまった。また、雹の

直撃で抱卵中のコチドリやキジの死亡も間近に観察した。その後、雹被害に遭ったヨシ原の回復を見たが、オオヨシキリやシゴイの姿は例年に比べて非常に少なく、キジの幼鳥などはまったく観察されなかった。

謝 辞

観察・調査に当たっては、我孫子野鳥を守る会の西巻実氏、我孫子市在住の内田聖氏に種々ご指導をいただくと共に貴重な助言・ご協力頂き感謝申し上げたい。

参考文献

- 時田賢一.1992.我孫子市北新田の鳥相.我孫子市鳥の博物館調査研究報告1:23-25
 時田賢一.1993.我孫子市北新田の鳥相.我孫子市鳥の博物館調査研究報告3:27-35
 時田賢一.1996.我孫子市鳥の博物館調査研究報告(1994-1995).我孫子市鳥の博物館調査研究報告5:193-197
 日本鳥学会.2000.日本産鳥目録.改定第6版.鳥学会,北海道

NO	Japanese name	Bird species	1990-1995	1998/6 - 2001/1											
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
77	オオシシキ	Gallinago hardwickii	○								○	○	○		
78	セイウカンキ	Himantopus himantopus	○									○			
79	ツバメチドリ	Glareola maldivarum										○	○		
80	ユリカモメ	Larus ridibundus	○	○			○				○		○	○	○
81	セウロカモメ	Larus argentatus						○							
82	オオセウロカモメ	Larus schistisagus	○												
83	カモメ	Larus canus	○												
84	ウミネコ	Larus crassirostris	○										○		
85	アシナシ	Sterna hirundo	○										○		
86	コアシナシ	Sterna albifrons	○										○		
87	シロコハト	Streptopelia decaocto	○				○						○		
88	キンハト	Streptopelia orientalis	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
89	カウコウ	Cuculus canorus	○					○	○	○	○				
90	ツツトリ	Cuculus saturatus	○												
91	ホトキス	Cuculus poliocephalus	○						○	○					
92	トラフズク	Asio otus	○												
93	コミズク	Asio flammeus	○												
94	オオコハズク	Otus lempiji	○												
95	アホハズク	Ninox scutulata	○												
96	アマツハメ	Apus pacificus	○										○		○
97	カサセミ	Alcedo atthis	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
98	アリスイ	Jynx torquilla	○												
99	コケラ	Dendrocoptes kizuki	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
100	ヒバリ	Alauda arvensis	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
101	ショウドウツバメ	Riparia riparia	○										○	○	
102	ツバメ	Hirundo rustica	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	
103	コシアカツバメ	Hirundo daurica					○								
104	イワツバメ	Delichon urbica	○				○								
105	キセキレイ	Motacilla cinerea	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
106	ハクセキレイ	Motacilla alba	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
107	セウロセキレイ	Motacilla grandis	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
108	クセハリ	Anthus spinoletta	○	○	○	○	○						○	○	○
109	ヒヨトリ	Hypsipetes amaurotis	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
110	モズ	Lanius bucephalus	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
111	ミソサザイ	Troglodytes troglodytes	○											○*	
112	ノコマ	Motacilla calliope	○**											○	
113	オオクワコトトリ	Motacilla svecicus	○											○*	○*
114	ルビヒタキ	Tarsiger cyanurus	○												
115	ジョウヒタキ	Phoenicurus aureus	○	○	○	○	○						○	○	○
116	ルビヒタキ	Saxicola torquata	○										○	○	
117	トラツグミ	Zosterops dauma	○	○											
118	アカハラ	Turdus chrysolaus	○	○	○	○									○
119	シロハラ	Turdus pallidus	○	○	○	○									○
120	ツグミ	Turdus naumanni	○	○	○	○	○	○						○	○
121	ウグイス	Cettia diphone	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
122	オオセウカ	Locustella pryeri	○												○*
123	コヨシネリ	Acrocephalus bistrigiceps	○										○		
124	オオヨシネリ	Acrocephalus arundinaceus	○				○	○	○	○	○	○	○		
125	セウカ	Cisticola juncidis	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○
126	キビヒタキ	Ficendula narcissina	○												
127	コサメヒタキ	Muscicapa dauurica	○												
128	エナカ	Aegithalos caudatus	○												
129	ツリスカハラ	Remiz pendulinus	○			○	○								
130	ヤマカハラ	Parus varius	○												
131	シメツバメ	Parus major	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
132	メジロ	Zosterops japonicus	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
133	ホオジロ	Emberiza cioides	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
134	コシユリン	Emberiza yessoensis	○											○*	
135	ホオアカ	Emberiza fucata												○*	
136	カシラガカ	Emberiza rustica	○	○	○	○								○	
137	アホシ	Emberiza spodocephala	○	○	○	○							○	○	○
138	クロシ	Emberiza variabilis	○												
139	シベリアシユリン	Emberiza pallasi	○												
140	オオシユリン	Emberiza schoeniclus	○	○	○	○	○						○	○	○
141	アトリ	Fringilla montifringilla	○												
142	カワラヒワ	Carduelis sinica	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
143	マヒワ	Carduelis spinus	○												
144	ベニマシコ	Uragus sibiricus	○	○		○	○							○	○
145	イカル	Eophona personata					○								
146	シメ	Coccothraustes coccothraustes	○	○	○	○	○							○	○
147	スズメ	Passer montanus	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
148	コムクドリ	Sturnus philippensis	○												
149	ムクドリ	Sturnus cineraceus	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
150	カケス	Garrulus glandarius	○	○	○	○	○						○	○	○
151	オナカ	Cyanopica cyana	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
152	ハシホソカラス	Corvus corone	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
153	ハシブトカラス	Corvus macrorhynchos	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		No. of species	134	55	48	58	66	57	41	48	55	67	62	65	55

表2. 新たに記録された鳥種 5目10科19種 *印:標識調査で記録
Table2. New recorded on Kitashinden

NO	Japanese name	Bird species	1998/6 - 2001/1												
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1	オオハクチョウ	<i>Cygnus cygnus</i>	○		○										
2	ヨシガモ	<i>Anas falcata</i>										○			
3	ヒトリガモ	<i>Anas penelope</i>											○		
4	ホシハジロ	<i>Aythya ferina</i>			○	○									
5	キンクロハジロ	<i>Anas fuligula</i>										○			
6	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>											○		
7	ハイロチュウビ	<i>Circus cyaneus</i>				○									
8	オオバン	<i>Fulica atra</i>									○				
9	イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>	○								○				
10	ヒバリシギ	<i>Calidris subminuta</i>									○	○			
11	オシロコウネン	<i>Calidris temminckii</i>	○	○	○	○					○		○	○	
12	ウスラシギ	<i>Calidris acuminata</i>				○	○				○				
13	ハマシギ	<i>Calidris alpina</i>				○	○				○		○		
14	コアアシシギ	<i>Tringa stagnatilis</i>										○			
15	ツバメチドリ	<i>Glareola maldivarum</i>									○	○			
16	セグロカモメ	<i>Larus argentatus</i>					○								
17	コシアカツバメ	<i>Hirundo daurica</i>				○									
18	ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i>											○*		
19	イカル	<i>Eophona personata</i>				○									
		No. of species	3	1	3	7	3				4	5	3	5	1

Avifauna of Kita-Shinden

Ken-ichi Tokita¹ Hisao Nakano²

Key-Word: Avifauna, kita-Shinden, abiko city, chiba

Kita-Shinden is a rice paddy habitat located along the Tone River, which forms the boundary between Chiba Prefecture on the south and Ibaraki Prefecture on the North. This area was formerly a marshland that served as a wintering ground for White-fronted Goose *Anser albifrons* and Bean Goose *Anser fabalis*, but was converted to rice paddy in the post war years. The Avifauna of this region was surveyed from June 1990 to December 1995. Surveyed microhabitats included rice paddies, reedbeds, dry fields, irrigation ditches and coppice forests. As a result of these surveys, 134 species in 35 families and 15 orders were identified.

Additional research was implemented from June 1998 to January 2001. Surveys were conducted every day by two hours after daybreak. Line transects were set at interval of 100 meters, and walked at a speed of 3km/hr. All visual and aural confirmations were recorded. Results from this research added the following 19 new species to the former list, bringing the total to 153 species in 39 families and 15 orders.

1. Abiko City Museum of Birds, Kohonoyama 234-3, Abiko, Chiba, 270-1145, Japan
2. Tsukushino 7-23-13, Abiko, Chiba, 270-1164